罪を赦す権威ある
神の御子イエス様

マルコ福音書2章1～12節
2023年1月8日
松田 基子 師

聖書は人間の存在の**根本問題**を**罪に置いて**います。 その聖書が言っている**罪とは**、**神様から離れる**こと、そして**神様への叛き**を言います。 神様から離れる事が何故罪なのでしょうか。アウグスティヌスという神学者は、

「罪とは、『永遠の法』に違反する全ての言葉、行為、思想である」

と言っています。

『永遠の法』は、

神様以外に誰も決める事は出来ません。 神様が絶対の聖であり、善であり、正義であり、愛であられるからです。 **神様に繋がっていて**こそ、何が**聖で**あり、**善で**あり、**正しい事で**あり、**愛であるか**が**分かる**のです。

神様が**人間を創造された目的**は、創造された世界を更に麗しく成長させて行く為に**永遠の法の与え主**である、**神様に聴き従い、愛を築いていく存在とする為**でした。 しかし人間は誘惑者に心を許し、誘惑者の言葉を信じて、神様の愛を裏切り、神様に叛いたのです。 その人間の姿を、使徒パウロは、ローマの信徒への手紙3章で次の様に言っています。 3章10節から、

「正しい者はいない。 一人もいない。 悟る者もなく、神を探し求める者もいない。 皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。 善を行う者はいない。 ただの一人もいない。 彼らののどは開いた墓のようであり、彼らは舌で人を欺き、その唇には蝮の毒がある。 口は、呪いと苦味で満ち、足は血を流すのに速く、その道には破壊と悲惨がある。 彼らは平和の道を知らない。 彼らの目には神への畏れがない」

と記しています。 これが罪の現実です。

ところで、ヘブライ人への手紙9章27節には、

「人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっている」

と記されています。 人は例え、世界を治め、巨万の富を得たとしても、反対に苦難の人生をおくったとしても、人間はこの地上に、生まれて来た以上、必ず死ぬのです。 死は平等に全ての人に与えられています。 ところで、死で、存在が無くなってしまうのなら心配は要らないでしょう。しかし、人の**命と人生は、神様から貸し与えられているもの**なのです。 皆、神様の前で**人生の総決算が問われる**のです。 そこで大変なことは、人間は皆、誰一人として、

『罪を犯さなかった』と

言える者は居ないということです。 神様の裁きに耐えられる者は誰一人としてないのです。

何故なら、

『罪の支払う報酬は死、永遠の滅びです』

と聖書は教えています。

ところが、人間の命の与え主である神様は、人類の創造主としての愛を貫き、御自身と一つ心で人類を愛し、人類を永遠の滅びから救いたいと願っておられる神の御子を人類の罪の贖いのために、人の世に、全き人間として、送られたのです。 それがイエス様です。

イエス様の地上での使命は、罪無き神の御子の身体を差しだして、人類の罪を贖われることでした。 イエス様の使命はそこにありました。イエス様は神様から宣教への出発命令を受けられると、人間の罪を引き受ける為に、ヨルダン川で罪の赦しを得させる為に、悔い改めの洗礼を授けていた、バプテスマのヨハネのもとに行って、罪人の列に並び、人類に連座して、洗礼を受けられました。 イエス様は洗礼を受けて、聖霊の内住と、天からの神様による、

「わたしの愛する子。 わたしの心に適う者」

との宣言を得て、故郷のガリラヤへ戻られ、

マルコによる福音書1章15節で、

「時は満ち、神の国は近づいた。
悔い改めて福音を信じなさい」

と言って宣教を開始されました。

イエス様はガリラヤ湖の4人の漁師を弟子にして、働きを始められました。 先ずなさったことは、病に苦しむ人々を癒されることでした。 イエス様は貧しくて、医者に掛かることもできないで絶望の中にいる病気の人達に、深い同情を示されました。 1章28節を見ますと、

「イエスの評判は、たちまち

ガリラヤ地方の隅々にまで広まった」
と記されています。 そのイエス様は39節で、
「**ガリラヤ中の会堂に行き、**
宣教し、悪霊を追い出された」
とあります。

その後、2章1節を見ますと、
「**数日後、イエスが再びカファルナウムに**
来られると、家におられることが知れ渡り、
大勢の人が集まったので、戸口の辺り
まで、すきまもないほどになった」
とあります。 カファルナウムと言う所は、ガリラヤ湖の北西岸に位置していますが、エジプトとダマスコを結ぶ重要な商業路が通っていたことから、そこにはローマの収税所があり、物流も人の往来も多く、宣教に適した所でした。
また、ペトロの家もあり、イエス様はここを宣教の拠点とされました。 イエス様がおられた家、詳訳聖書には、
「**おそらくペトロの家**」
と記されています。

ペトロはイエス様の弟子になるまで、持ち船を持った中堅の漁師であり、会堂を訪れる巡回教師を家に招いて、接待していた事からも、信仰篤く、誠実で周囲の人望を集めていました。
『そのペトロが、イエス様の弟子になった』
と言うのですから、周りの人は一層イエス様の語られる言葉を聞きたいと思ったでしょうし、このペトロの家に、イエス様が居られると分かると、押しかけて行かずにはいられませんでした。 大勢の人が集まって来て、家の中は満員で、戸口の辺りまで、すき間が無い程だと言うのですから、外にも人が溢れていた事でしょう。 外にいた人達も、家の中から洩れ聞こえるイエス様の言葉に、必死に耳を傾けていました。

そんな所に、一人の病人を、マット状のものに寝かせて、4人の男性が四隅を担いで現れたのです。 病気の人は中風を患っていたと記されています。 新しい協会共同訳では、
「**体の麻痺した人**」
と訳されています。 ガリラヤの何処から来たのか、どのぐらいの距離を担いで来たのかは、記されていません。 でも、既に、多くの人々が集まってイエス様の話に聴き入っているところですから、きっと近くではなかったでしょう。 四人の男性の中、誰かがイエス様の居られる場所を聞いて、すぐに仲間に知らせたに違いありません。

体が麻痺して寝たきりの男性と、彼を担いで来た4人の男性の関係が兄弟なのか、親戚なのか、また、友達なのか、記されていませんが、4人の男性は、体の麻痺した男性を心から愛し、尊敬し、
『何か、彼の役に立ちたい』
と言う心で、一致した関係でした。 4人の男性が、体の麻痺した男性のことで、一致出来ると言うのですから、彼は病人であっても、
『神様を信じる心豊かな人であった』
に違いありません。 どんな境遇に置かれても、**神様を信じて愛を与える人**がいます。 **人の助けに心からの感謝と微笑みを与える病人**は、**奉仕する人に**、奉仕の**喜びと更なる力**を**与え**ます。

担がれてきた病人は、そんな男性であった様に思われます。 彼は謙遜です。 その謙遜は、神様を信じる事から来ていました。 イスラエル人の素晴らしさは、生まれた時から、神様を知って、神様の偉大さと、愛を知ることが出来た事です。 彼はいつの頃から、体が不自由になったのかは分かりませんが、
『幼い時から、天地万物を創造された、全能の神様を信じて育ちました。 神様の全能を信じている彼は、大預言者が現れたなら、自分もきっと癒して貰えるに違いない』
と信じていたでしょう。 それと共に彼は
『神様の前に、真実に生きる事』
を願ったでしょう。

神様を信じる人は皆、
『自分の罪深さに気付きます。 人は皆、自分では自分の罪が分からないものです』
神様の愛と、聖さが分かって初めて、自分の心の汚れ、醜さ、罪が分かって来ます。
『彼は神様を信じ、求めれば求める程、自分の罪を示され、神様への赦しを求める日々であったでしょう』
『自分の罪が分かるという事は、神様が分かる』
と言うことです。 パウロが言う様に、

『自分の罪を認めようとしない人は、
神様を探し求める事も無く、神様への
畏れもありません』
ですから、**自分の罪が分かるということ**は、
良いことであり、**神様を求める心を起こさせる**
大切なことなのです。

そんな日々を生きている体の麻痺した人を中心に、四人の男性もまた、同じ信仰に生きていました。 彼らはイエス様の言葉と癒しを、きっと目の当たりにしたに違いありません。 彼らの意見は一致しました。 体の麻痺した彼を、
『イエス様に癒して頂こう。 イエス様は
必ず癒して下さるに違いない。』
そう確信して、4人はイエス様の素晴らしさを
彼に話して聞かせ、
『自分達があなたを担いで、イエス様の
もとへ連れて行くから』
と励ましたことでしょう。

彼らは、イエス様がカファルナウムに帰って来られるのを待っていました。 そして、遂にその情報を得ると、彼をマットに寝かせ、四人で四隅を担いでイエス様のもとへやって来たのです。
ところが来てみると、家に入れるどころか、戸口の辺りも人だかりで、イエス様のもとに近づきたくても、一歩も中に入る事が出来ません。
しかし、ここで諦める訳にはいきません。
誰一人として、
「これじゃあ中に入れない。 またにしよう。」
とは言わなかったのです。 仲間の一人が言いました。
「屋上に登って、屋根を剥がし、イエス様
が居られる辺りに彼をつり下げよう。」
この提案に、彼らの中の誰一人として、
「そんな、皆に迷惑が掛かるような事は
止めよう」
とは言わなかったのです。 四人は一刻も早く、彼が癒されることを、自分の事として願ったのです。

四人には、彼を心から愛し、尊ぶ心がありました。 ところで、イスラエルは、雨季と乾季がはっきりと分かれています。 雨季は、短期間です。
そこで、屋上の構造は、梁りの間を粘土で埋めています。 外階段が付いていて、屋上では物を乾燥させたり、夕涼みに使われたりするのですが、雨季の前に補修するのだそうです。
構造上、屋根を剥ぐ、穴を開ける、と言う事は、男性が四人もいれば可能でした。

彼らはこの提案に皆同意して、決行したのです。 下で話しをして居られたイエス様、それを聞いていた人々は、屋上からの物音に、何が起きるのかと見入っていたでしょう。 すると病人が吊り降ろされて来ました。 人々は、驚きの声を上げました。 しかし、イエス様は5節に、
その人達の信仰を見て、中風の人に、
「子よ、 あなたの罪は赦される」
と宣言されました。

イエス様は何故、
「あなたの病は癒される」
と言われなかったのでしょうか。 イエス様は、御自身の使命は、人類の罪を引き受け、身代わりの犠牲となって、血を流し、人類の罪を贖う事にあることをいつも自覚されていました。 人間存在の**根本問題**は、
『神様への**叛きの、罪にある**のです。』
その**罪の解決なしに、人間に希望はありません**
「イエス様はその人たちの信仰を見て、」
とあります。 その人達とは、担いで来た4人の男性ばかりではありません。 病人本人の信仰を、イエス様は見ておられました。 彼の神様に対する罪の自覚、神様を畏れ敬い、聖くありたいとする心を、イエス様は見ておられました。

罪が分からない人に、イエス様が、
「あなたの罪は赦される」
と言われる筈がないのです。 しかし、この
イエス様の宣言が、律法学者の間に異議を
もたらせました。 7節を見ますと、居合わせた
律法学者たちは、
**「この人は、なぜこう言うことを口にするのか。
神を冒涜している。 神おひとりのほかに、
いったいだれが、罪を赦すことができる
だろうか」**
との非難を心に抱いたのでした。

イエス様は霊の力で彼らの心の内を
お知りになり、8節に、
「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。

中風の人に、

『あなたの罪は赦される』

と言うのと、

『起きて床を担いで歩け』

と言うのと、どちらが易しいか」

と問い掛けられました。 律法学者たちは、それに対して返事をしていませんが、彼らはイエス様を頭から疑っているのですから、恐らく、

『イエスよ、あなたが本当に神から遣わされているのなら、この男性を癒して見せてくれたらどうかね』

と言う気持だったでしょう。

彼らには、自分の罪が分かっていませんでした。 彼らはモーセの座に坐って、律法で人を測り、人を罪に定めて、

『自分は罪無し』

としていたのです。 彼らは神様を信じていたのではなく、自分達が築き上げた、律法社会を信じていました。 自分の罪が分からない人たちでした。 そんな彼らに対して、

イエス様は10節から、

「**人の子が地上で罪を赦す権威を**

持っていることを知らせよう。」

そして中風の人に言われました。

「**わたしはあなたに言う。 起き上がり、**

床を担いで家に帰りなさい」

と命じられました。

人の子と言う呼称は、旧約聖書、

ダニエル書7章13節に、

「**夜の幻をなお見ていると、**

見よ、【人の子】のような者が天の雲に

乗り、【日の老いたる者】の前に来て、

そのもとに進み、権威、威光、王権を受けた。

諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え、

彼の支配はとこしえに続き、その統治は

滅びることがない」

とあります。 この預言から、

【人の子】とは、神様から権威を与えられ、終わりの日の審判者として来られる方を意味していました。 イエス様は当時、メシアと言う言葉が、

『ダビデ家再興』

と言う政治的な意味合いが強かった為に、御自身が真の救い主であることを表す言葉として、

「**人の子**」

の呼称を使われました。

イエス様は御自身をここで、罪を赦す権威を持っておられる事、つまり、神の御子、預言されて来た人の子である事を宣言なさっているのです。 中風の人は、イエス様の赦しの宣言と癒しに、身も心も癒され、起き上がり、すぐに床を担いで、皆の見ている前を出て行ったのでした。

人々は驚き、神様を讃美しました。

イエス様は人類の全ての罪を引き受けて、

身代わりの十字架に架かり、苦しみを一身に受けて人類の罪の贖いを成し遂げて下さるのです。

私達はイエス様に何を求めているでしょうか。

自分の罪にどの位、気付いているでしょうか。

今日の**価値観の多様化**は、人々を愈々**罪が分からない人間にして**しまっています。 皆**自己本位の考えを正当化**し合っています。 パウロがローマの信徒への手紙3章で言っている状態そのものです。

この様な社会の中にあって、神様の御心を知り、自分の罪を示され、イエス・キリストの**十字架の贖いを戴き**、**罪赦され**、キリストを信じ、**命の道を歩めること**こそ、**人生の根本問題の解決です**。 この宝を失う事がないように、身体の麻痺した人と、4人の仲間達に倣って、**イエス・キリストを信じ**、**互いを尊び**、**愛し合い**、**支え合って**参りましょう。

お祈りをいたします。

愛と憐れみに富み給う天の父なる神様。

私達をイエス・キリストの御救いに導き、

如何に罪深いかを教えて下さり、信じるわたしたちの罪を赦し、命の道へと導いて下さり、有難うございます。

愈々キリストを慕い、罪を示され、清められて御足の跡に従う事を喜ぶ者と成らせてください。

尊い救い主、イエス・キリストの

お名前によってお祈りを致します。

アーメン。